

2019 年 8 月 4 日（日）「賜物の管理者」

マタイ 25:14-30

14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。 15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。

16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。 17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。 18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。

19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。 20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』 21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』 22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』 23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。 25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』 26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。 27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。 28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』

29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。 30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さない。そこで泣いて歯ざしりするのです。

【序論】

今日は「タラントの譬^{たとえ}」という、最も長い主イエスの譬^{たとえ}話^{ばなし}を学びます。私たちに
とりまして馴染^{なじ}み深い譬^{ふか}話であり、クリスチャンでない方々の間でも「タラント」とい
う言葉は流布^{るふ}しています。生まれつきの特別な能力、あるいは何らか人を惹きつける要
素をもった人々のことを「タレント」という呼び方をしますが、この言葉は今日の「タ
ラントの譬」に由来します。とはいえ、一般に使われる意味と、私たちが使う意味はか
なり異なっているということも理解しておく必要があるでしょう。キリスト者が正確な
意味において「タレントをもっている」と言う場合、それは「生まれつきの才能」とい
うよりもむしろ、救われた人が主イエスによって与えられる「霊的賜物」「福音宣教の
ために必要な能力」のことを言うのです。ただ、それまでに培^{つちか}ってきたものが「タラ
ント」として用いられることももちろんあるでしょう。そして、もっている「タラント」
をどう用いて生きるかが、今日のテーマとなります。

【本論】

多くの場合、この「タラントの譬」は独立した読み方がなされます。この譬話だけを
取り出して読んだとしても十分意味をもちますし、面白い。しかし、講解説教^{こうかい}の中で、
24章からの流れでこれを読むと、その真の意味が分かってくるのです。これは、主イ
エスの再臨に備えて生きるキリスト者のあり方を問う譬話であり、「目を醒^さまして生き
る」とはどのようなことであるかを具体的に教えているものでもあります。前回扱った「花
婿を待つ十人の乙女^{おとめ}」の譬では答えきれなかった問いに答えてもいる¹。「油を備える」
とはどのように生きることなのか。それは、結論を先取りするようではありますが、賜
物を活用して生きるということなのです。

本論 1. 主が与え給う「タラント」

天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。彼は、
おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには
一タラントを渡し、それから旅に出かけた。(25:14-15)

¹ 新改訳では訳出されていませんが、14節冒頭には「**γὰρ**」(なぜなら)という接続詞が入って
いて、先の譬話とのつながりが意図されています。つまり、「タラントの譬」は「花婿を待つ
10人の乙女」の譬を補強する役割を負っていると言えます。

「旅に出る人」というのは主イエスの昇天^{しょうてん}、「しもべ」とは弟子たち（キリスト者）を指すでしょう。「財産」とは賜物で、彼らが請け負う何らかの事業とは福音宣教です。ここでは面白い描き方がなされていますが、「おのおのその能力に応じて」とは、その人がやろうとしている働きに対して必要な賜物の大きさや量のことが言われていると思われる。現実には、实际的資金が必要であることが多いでしょう。主イエスご自身が一人一人に何が必要であるかをよくご存知であり、それ相応の賜物を与えてくださる。

「タラント」というのは、元々重さの単位でしたが、やがて通貨の単位として使われるようになりました。ここには三人のしもべが登場し、違った額の資金が預けられます。1 タラントとは 6,000 デナリに相当すると言われ、1 デナリが労働者の一日分の賃金に当たりますから、単純に一日 10,000 円として計算すると、1 タラントとは 6,000 万円になります。これは決して少ない額ではありません。5 タラントは 3 億円、2 タラントは 1 億 2,000 万円。差はあれど、各々に莫大な資産が託されたのです。このことが示唆するのは、誰であれキリスト者は主イエスから大きな賜物を受けているということです。誰も「私には何もない」などと言うことはできません。

大切なことは、自分のタラントを知ることであり、それをどう用いて生きるかということです。私が大学に入った頃、ある先生がこんなことをおっしゃっていたのを印象深く覚えています。「皆が一流を目指さなくてもよい。三流でもいいのだ。しかし、三流を極めなさい」と。自分のもっている賜物を主の御前に精一杯活用して生きること、それがタラントを用いるということなのです。タラントは様々な解釈できると思いますが、敢えて言うならば、リーダーシップ、霊を見分ける目、個人伝道、癒し、説教、祈り、賛美、楽器演奏、語学、経験、知識、財産、管理能力、技術、金銭的サポート、教育、社会的地位や信用などが挙げられるでしょう。賜物は必要に応じて増やされることもあります。

本論 2. 主のためにリスクを負う者

五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけたところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。(25:16-18)

「すぐに行って」と言われているように、5 タラントを預かった者は積極的に行動を始めました。これは主人をどれくらい愛しているかの表れとも言えるでしょう。「商売」（事業）は絶対的な保証はありませんので、ある程度のリスクを覚悟で始めていかなくてはならないものです。成功すればリターンがありますし、失敗すれば失うものがあり

ます。それを恐れずに何かを始めていくことが主に求められている。最初の二人はリスクを取り、それなりのリターンを得ました。

ところが、「1 タラントを預かった者」は預かったお金を地に埋めたというのです。古代社会においては、強盗や侵略者から身を守るため、宝を畑に隠すという習慣がありました（畑に隠された宝の譬／13:44）。彼にはどういう心理が働いたのでしょうか。彼の中には「1 タラント」が大きな預かり物であるという認識があったはずで、それを失うことを恐れたのです。地に埋めることによって、とにかくそのお金を守ろうとした。これもまた一つの生き方なのかも知れません。彼はリスクを冒すことを避け、守りの人生に徹したのです。増やすことも減らすこともない。そっくりそのまま主人に返す選択をしようと。

さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』（25:19-23）

主人の帰還は主イエスの再臨を表します。「清算をする」(συναίρω) とは、「共に」(σύν) + 「挙げる」(αίρω) の合成語であり、原意は「共に挙げる」です。「数え上げる」といったニュアンスでしょう。それぞれ資金を2倍に増やした二人は誇らしげに主人に報告をします。主人もそれを喜ぶ。「忠実」(πιστός) とは「信用できる」「信頼できる」という意味であり、彼らが主人の信頼を増し加えたことが窺えます。雇用主に信頼されるということは、部下にとってお金を得る以上の喜びです。そして、神の国の原理では、信頼された人には更に「たくさんの物」が任されるようになる。神の国における永遠の心地よい労働であり、そこには苦痛はなく、神がお創りになったものを管理する喜びに溢れています。もちろん、そこからたくさんの祝福を得ます。地上における働きは「わずかな物」（まことに小さな働き）ではありますが、それは天国の労働とつながっている。この小さなことに忠実に歩むということが、永遠の世界における莫大な神の資産の管理とつながっているのです。

本論 3. 現状に安住する者

ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』(25:24-28)

三人目の報告です。彼は埋めておいたお金を掘り出し、そっくりそのまま主人に返しました。彼の言動には何の「悪びれ」もありません。「失わなかった」ことを、さも偉いことであるかのように言います。主人のことを「蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方」という彼なりの見解を示す。これは、種を蒔いてもいない畑から収穫だけを得ようとする理不尽、あるいは羊の群を野に連れ出すこともしないで多くを集めようとする不合理を言い表す表現です。これは「悪い支配人」を表すための当時のことわざことわざ 諺 だったのでしょうか。彼の言っていることは真実でしょうか。彼は1タラントを預かっていたのではありませんか。種は蒔かれていたのです。蒔かれた土地に水をやり、その種が芽を出し、成長して木となり、多くの実を結んでいくようにするのが、託された者の務めでした。しかし、彼の中には「種を預かった」という意識はなかった。それを箱に入れてしまいこんでしまった。何の成長もできない環境に種を追いやって、時間ばかりが過ぎていくのをゆるしたのです。

このことは霊的には何を意味するのでしょうか。それは、与えられた賜物を用いない生き方。恐れて何のリスクも取らない生き方を表します。主イエスに与えられた賜物が何であるかを考えてみたこともなく、人任せになり、神と人ともに仕えることを忘れてしまった生き方のことが言われている。このような状態は霊的に眠りこけている危険性があり、主イエスに対してその人生を報告するとき、この1タラントを地に埋めた人のように叱責を受けてしまうかも知れません。

この主人は「**だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった**」ということを行っています。私は一読者として長年この意味を理解するのに苦労してきました。賜物を銀行のようなところに預けることができるのか。ここで使われている「銀行」

(τραπεζίτης) という言葉は「銀行家」「両替人」を意味しますが、銀行の前でテーブルを広げてお金の交換をしている人をイメージするとよいでしょう。当時、銀行に預けておけば結構な利息を得ることができた。今の日本の低金利では考えられないことです

が、銀行に預けるということは資金を守ることだけではなく、それを増やすための最低限の努力だったのです。つまり、これは私の解釈ではありますが、自分の賜物を用いてくれる人に頼んで、それを間接的に使ってもらう、あるいは指導を仰ぐということを意味するでしょう。私たちは自分もっている賜物が何であるか、なかなか分からないこともあります。ならば、それを見出すことのできる人に相談することで、それが見えてくるということもあるのです。

だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。(25:29-30)

29 節の言葉もまた、当時の格言でしょう。経済の世界では、多くの資本をもつ者はそれによってますます富を蓄積し、貧しい人はなかなかその競争に勝つことができず、僅かな資産まで奪い取られてしまうという冷たい現実があります。霊的な世界においても、賜物が与えられ、活用すればするほど、ますます増し加えられていくという原理がある。しかし、もし賜物を地に埋めているならば、その人生には神に対して残るものは何もなくなくなってしまうかも知れません。自分にできたはずの奉仕が、他の人に与えられてしまうということが起こり得るのです。

【結論】

私たちは自分がどういう人生を歩んでいるか、霊の目を開いてよく見据えなくてはなりません。神が与えてくださっている賜物を活用し、たくさんの稔りを主にお返ししたいのです。そのためには、失敗を恐れずに進んでいきたい。よく考え、やってみたことが、仮に失敗したとしても、主はそれを「用いた」ということを喜んでくださるでしょう。そして、別の形で違ったチャレンジが与えられ、道が拓かれていくこともあります。

私が牧師になったとき、先輩牧師でもある叔父が言ってくれました。「失敗を恐れずに何でもやってみなさい」と。自分だけではなく、互いの賜物を見出し合い、励まし合いつつ歩いていく教会でありたいと思います。

【祈り】

タラントの源であられる神様。あなたは無限の蓄えの中から、一人一人に必要なものをお与えになります。それは、求めれば求めるだけ与えられるのでしょうか。私たちもあなたの働きを進めていくために、多くの必要なものがあります。まず、何が必要なのかに気づかせてください。そして、適切に求め、与えられたものを活用して生きていくことができますように。そして、一つでも多く得た稔りをあなたにお返しできるようにと願います。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、
ご自身の宣教を推進するため、各々の聖徒に賜物を与え給う、父なる神の愛。
働きの稔りを喜び、更に多くのものを任せ給う、主イエス・キリストの恵み。
賜物の良き管理者として、神の国の建設に携わらせ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。